

(付) 本校における入学者選抜方法をめぐる問題と資料

研 究 部

この資料は、本校の学校紀要第1集～第13集及び本校入試関係資料等を引用、加筆し、昭和44年9月以降の本校「附属学校在り方委員会」（教育学部と合同）の検討資料及び附属高校部会研究大会特別部会（附属学校のあり方）での発表資料等を整理して、再録したものである。

(資料)

1. 入学者選抜方法の変遷

2. 高校入試志願者の進学適性検査得点分布（第2期赤塚時代34～36年度）
3. 高校第2次検査志願者の学力得点分布（第3期東山時代42年度～44年度）
4. 各種成績の相関
5. 中3進路状況の推移と中・高連絡方法
6. 「あり方委員会」における検討

1. 入学者選抜方法の変遷

学校所在	入学年度	中学選抜方法	高校選抜方法（附中出身者を除く）
豊川市 (第一期)	昭22 (1回生)	学力検査により上・中・下に分け、内申・面接・地域を参考にし層化選抜した	
	23 (2 ")	"	
	24 (3 ")	学力検査により65%をとり、あと抽選	
	25 (4 ")	学力検査により70%をとり、あと5段階に分け層化選抜とした	学力選抜のみ
	26 (5 ")	"	"
	27 (6 ")	24年度とほぼ同様	附中出身者のみ、外部中入学なし
	28 (7 ")	5月に市内中学校から希望者を集めた44名入学	附中(豊川)よりの希望者のみ 14名入学
	29 (8 ")	学力選抜で定員の2倍をとり、あと抽選	公立高校と同日・同試験 応募定員に満たず67名入学
	30 (9 ")	学力選抜のみ	学力選抜のみ
	31 (10 ")	完全抽選(精密検査により1～3名除く)	学力検査で80%までとり、あと抽選
東区東芳野町 (第二期)	32 (11 ")	"	"
	33 (12 ")	"	"
	34 (13 ")	"	" 70% "
	35 (14 ")	"	抽選で300名にしぼり、学力検査で70%までとり、あとは抽選
	36 (15 ")	"	" " "
	37 (16 ")	" (精密検査により4～5名除く)	200名 " 40%
千種区不老町 (第三期)	38 (17 ")	"	"
	39 (18 ")	"	抽選で200名にしぼり、学力検査で定員の2倍とり、面接試験を行って決定
	40 (19 ")	"	第1次抽選約(230)第2次学力検査
	41 (20 ")	" (各種の検査により約10名)	第1次(LIT)で約300名
	42 (21 ")	" (" 十数名)	第2次 学力検査
	43 (22 ")	"	第1次(MF基礎能力テスト)約300名
	44 (23 ")	"	第2次 学力検査
	44 (23 ")	"	第1次(基礎能力テスト) " 第2次学力検査(5教科)

ここでは一応3期にわけてみた。

第1期(昭和22~29)豊川時代。本校の創設期、同時に新教育の時代、「抽選又は層別選抜」などを試みている。

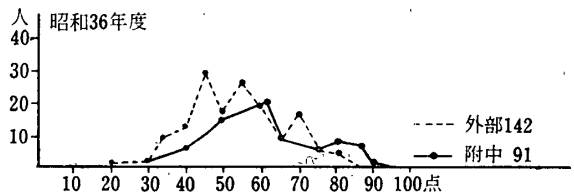
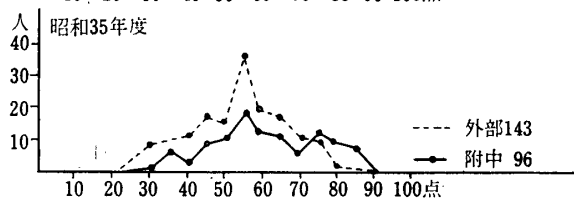
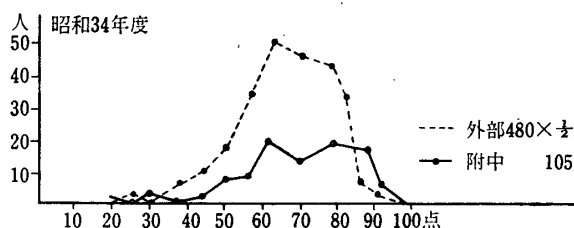
第2期(31~38)名古屋赤塚時代。反動化する時流に抗して、「中学の完全抽選制、高校も大巾抽選制」を実施。この時期、愛知県では高校大学区別に移行。公立高校では次第に学校格差と序列化が進行し、名大附属中・高校は「ガラガラ学校」(?)などと呼ばれ、抽選を特色とする学校としての世評が固まった。

第3期(39~)名古屋東山時代校舎新築と学級増。高校1学年当り2学級から3学級となる。学年進行に伴う生徒組織の多層化に対して、選抜法の修正がみられ、再び、入学者選抜の在り方の検討が迫られている。

しかし、2の高校入学志願者の進適得点分布にも明らかのように、高校の抽選制がとられていた時期(第2期)には、外部からの受験者の学力構成が急激に低下していった。第3期はその手直しの必要が考えられた時期といえよう。

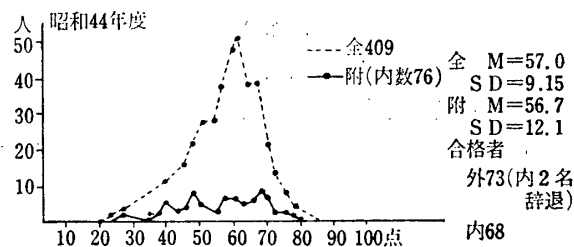
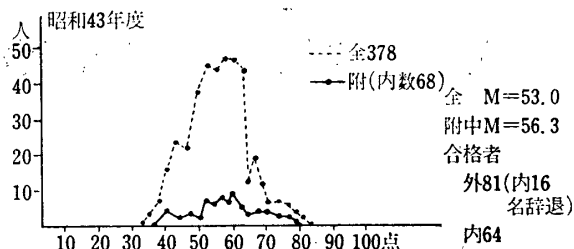
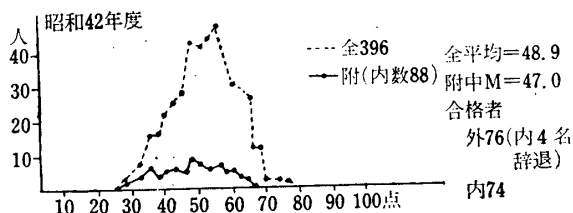
2. 高校入学志願者の進適得点分布

—外部中学受験者と附属中学出身者との比較—
(第2期抽選中心、赤塚時代)



3. 第2次・学力検査得点分布

(第3期, 東山時代)



4. 各種成績の相関

① 昭和41年度入試と高校1学期末各科別成績相関

科目	国	社	数	理	英	保体	音	美	家
相関係数	0.40	0.47	0.53	0.53	0.67	0.15	0.38	0.07	0.33

- ・英数理は高い相関, 国社やや低い
- ・保体及び美術はほとんど相関なし, 次に音・家が悪い

いずれも技能教科であり, 評価の全領域が検査できないことを示している。

② 内申と高校1学期との各科別成績相関

	国	社	数	理	英	保体	音	美	家
付中出身(70名)	0.80	0.44	0.77	0.56	0.82	0.73	0.70	0.02	0.27
外部出身(76名)	0.59	0.25	0.44	0.33	0.65	0.12	0.00	0.45	0.00

- ・付中出身については美・家を除いて高い相関(美・家の担任が変わった)
- ・外部出身については, 国英数の相関は高いが, 保体・音・家庭ではほとんどない。

③ 昭和42年度入試関係資料より

相 関	r	備 考
内申と入試学力	0.36	外部 入学者
1学期成績と能検	0.10	"
1学期成績と内申	0.19	"
内申と能検(市内中学51名)	0.06	外部受験者任意抽出
内申と能検(市内中学54名)	0.50	
特定学校		1学期成績と入試学力=0.35
A校内申と能検	0.18	
B校内申と能検	0.39	

④ 43年度入試の相関

- ・第1次基礎能力テスト——中3内申(付中) 0.52

- ・第2次学力検査 9教科——中3内申 0.81
総点200点 (付中)
- ・第2次学力検査——第1次基礎能力テスト 0.62
(付中出身)

s, 43年度入試学力検査成績と4科目(美・音・保体・技家)との成績の分析によると、5科目(国社数理英)と4科目の成績の相関は0.3以下で低くなっている。

⑤ 44年度(第2次検査)

5教科(1教科40点×5=200点)
外部 平均 114.2 SD=16.8
内部 平均 113.2 SD=24.2

・相関

外部内申と入試学力=0.45

内部内申と入試学力=0.84

なお43年度入学者の成績の追跡研究(持田教官)によると、

基礎能力テスト——入試学力 r=0.46

基礎能力テスト——高1・1学期(中間) r=0.14

第2次学力検査——高1 " " r=0.53

" " ——高2・2学期(中間) r=0.54

入学試験の時点での基礎能力と入試学力(学力検査)の相関はかなりあるが、その後の校内のテストとの相関は低い。(むしろ基礎能力テストは抽選にかわるものとして、学力テストと同じような相関がない方が目的を達しているともいえる)

5. 中3進路状況の推移

年度	卒業者数(A)	他校進学(B)	B- (内数) (C)	B/A	C/A	備考
37	94	7	7	7.4	7.4	
38	94	12(3)	9	12.7	9.6	()内 就職1 を含む
39	88	8	8	9.1	9.1	
40	88	17(2)	15	19.3	17.0	
41	94	20(2)	18	21.2	19.1	
42	90	26(3)	23	28.8	25.5	
43	90	22(9)	13	24.4	14.4	
44	85	13(2)	11	15.3	12.9	

()内成績上位者で内数

一般に、附属学校はその下級学校との連絡関係の上で、独特の問題をもっている。つまり、一貫教育、研究の立場から見れば、各小、中、高各学校段階で切断せず継続する方が望ましいといえる。しかるに、学力組成その他の面で(例えばエスカレート学校に対する社会的非難、外部からの受験者との学力バランスなど)全面的に上級段階への進学を保障することは難しい。この点で本校でも附属中学と附属高校の接続関係は困難な問題をはらんでいる。このことについては既に本校紀要第1集(1955年)にもその問題点の研究があるのでその一部を再載すると次のようになる。

(中学・高校の連絡方法)

連絡法	利	害
イ. 完全入学	1. 6カ年継続研究が可能。 2. 父兄の高校進学に対する不安がなくなり、落ち着いた協力が得られる。 3. 校内における高・中生徒の融和がます。(教官も一体になるから) 4. 中学教育が入試にわずらわされない、理想的な指導が期待される。	1. 生徒の実力競争の意識が薄れて、人間的に弱くなる。 2. 中学生中の落ご者が、高校に入っては、ますます無理がでやすくわれない。 3. 中学の選抜のしかたによっては、高校の学習に耐えない者が入ってくる。 4. 不当な優越感をますます強める。 5. いわゆる温室育ちになりやすい。 6. 文部省の通達に反する
ロ. 平等試験	○完全入学の場合の欠点が救われる。	1. 6カ年継続研究ができない。 2. 父兄の高校進学に対する不安が強まり、落ち着いた協力が得られない。 3. 校内における高・中生徒の対立分離を招きやすい。 4. 中学教育が入学試験に影響されやすい。
ハ. 制限入学	○完全入学と平等試験の双方の長所が生かされ、短所が補われる。	1. イ.の欠点に近い。 2. 及落線上の生徒及び父兄に心理的影響が大きい、また結果に疑惑をもたれやすい。 3. 三年生の学級担任の立場が非常に苦しくなる。

(注) 1. 完全入学とは附属中学校の卒業生を全員無条件で附属高校に入学させること、平等試験とは外部の中学生と平等に試験して入学させること、制限入学とは附中で事前にガイダンスして、たと

(付)本校における入学選抜方法をめぐる問題と資料

えば定員の70~80%を入学させることをいう。

2. 連絡を円滑にするため、高校の学級数を中学のそれより多くするか型形式が考えられる。(理想的であるが当校では実現困難)。

所で、(注)の2にいう「連絡を円滑にするため、高校の学級数を中学のそれより多くする「かき型形式、」については、問題を解決し得たであろうか。皮肉にも高校1学級増の行われた40年度以降において、他校への進学者が漸増している状況である。従って、この点からも「中、高選抜制度と連絡関係」が問題となる背景があるといえよう。しかし、中学をほぼ完全抽選制で、高校を普通科B類型を中心として、しかも小規模学校のため、大巾な選択制や多様なカリキュラムを編成できない本校にとって、中・高の円滑な連絡関係の解決は困難な課題として残るように思われる。

6. 「あり方委員会」における検討

選抜方法や研究プロジェクトをめぐる「あり方委員会」での論議を要約すると以下ようになる。

- (1) 附属学校のあり方をどう考えるか
 - a. 研究実証, モデル校, 教育実習の三本の柱
 - b. 教育養成大学系とちがう大学の教育学部の附属という性格から研究実証, モデル校に力点を置いて考える。
- (2) 研究, モデル, という場合, 「何の」研究, モデルなのか?
 - a. 現在の学校体系, 指導要領の枠内での——
その場合は, 主として教育方法と, 狭い意味での教育内容の研究ということになる。
 - b. 「やや」「現在」を起えて, 教育内容そのもののくみかえや方法の研究。
 - c. もっと未来への展望のなかで, 学年体系や教科そのものを「現実」のゆるすはんい内で大胆にくみかえ, 実験研究をこころみる。
などのちがいを考えることができる。
- (3) 教育と研究, 教育学と教科教育, との関係
 - a. 研究の場合, あくまでも「生きた子供を, 現実のなかで教育する現場」という視点が必要でそれを実験研究の名によって逸脱することは許されない。
 - b. 抽象的な教育学だけでは, それぞれの具体的

な各教科教育の問題をとくことはできない。そのいみで, 教育学部(現在の)の限界があり, 文・理等各学部との協力が必要になる。

- (4) 「公立なみ」の問題をどう考えるか
 - a. 公立の学校に役立つ研究でなければならない。
 - b. しかしどうしたら役立つのか。
形式的に公立と同じ形をとろうとしても, 少人数小規模の学校という制約をまぬがれないし, 教育委員会の制約下でないし, 人事移動もあまりない。地域の父兄の制約? もないなどの差異も認めておく必要があろう。
 - c. 附属の現状と性格を生かしながら, 役立つ方向をさぐっていく必要があろう。
「公立」には公立としての研究成果もつみ重ねられている。それとはちがう附属の独自性を考えていきたい。
- (5) 予想される幾つかの方向——選抜の方法
 - a. 現状の選抜を多少手直していく方向
 - b. 中学・高校を分離して, 中学から相当数のものを進路指導によって「外」に出し, 公立と同日, 同問題で高校入試を行なう。
 - c. 中学→高校全入6ヶ年一貫教育を前提として, 中学のとり方, 高校での外部のとり方, 高校に入ってからコース別, 能力別等の問題を検討する。
 - d. 現在の6.3.3制への批判検討をこめて, 現行法規体制のゆるすはんい内で, 望ましいあり方をさぐる。
例えば, 4.4.4制への展望のなかで, 2.4制をこころみるなど
 - e. 一定期間ある研究テーマの下にそれにみあう生徒をとっていく方法

基本的, 根本的な論議はなされたが, 選抜法の具体的な案となると次の表のようになりかなり多様な案が各委員から出された。

○ いろいろの考え方

	附属中の選抜	附中 → 高	外部中学 → 高	高校カリキュラム
A	$\frac{90}{110}$ (市内)	全入原則	能検, 内申	1年共通 2, 3年選択
B	完全抽せん(市内)	附中の20%カット	能検, 内申	〃
C	完全抽せん(〃)	少くとも75名は入れる	県と同時試験	1年共通 2, 3年コース制

D	$\frac{90}{110}$	全 入 原 則	学力・内申	1年英数能力別 2, 3年コース制
E	完全抽せん	附中20%カット	〃	〃
F	完全抽せん(小学区)	全 入 原 則	〃	1年共通 2, 3年選択
G	$\frac{90}{100}$	全 入 原 則	〃	〃
H	$\frac{90}{100}$	〃	国 数 英	〃
I	$80 + \alpha - \alpha$	〃	能検・内申	1年英数能力別 2, 3年選択
J	1.5倍～2倍とって学力	全 入	学力・内申	
K	層別又は完全抽せん	全 入	層別能検	中, 能力別 高2, 3年選択

これらの諸案から、特に本校における中・高連絡方法の問題を中心に、極端な案を除くと、かなり現状に近い形となり、大巾な変更は困難であり、望ましくないとの結論に達した。

まとめの方向としてほぼ次の形となり、教官会議を経て、昭和45年度の中・高募集方法の案が固まっていた。

- ① 附属中の選抜法。抽選を中心とする現行の方法で、第2次選抜の諸検査を工夫する。
- ② 附中より、高への接続。外へ排除するのは望ま

しくない了解の下で附中の下位20%をこえてはならない線の確認、

- ③ 外部中学より高への選抜。基礎能力検査を積極的に活用し、学力テストでカバーし得ない諸能力を検出し、追跡研究にも役立ち得ることをあらためて了解し、第1次選抜を基礎能力検査、第2次を5教科とする。内申等の重視は従来と同様。
- ④ 高校でのカリキュラム
高1共通、2, 3年選択制導入の方向で工夫すること。
(高森)